**本谷集落跡**

今では木々が生い茂り、静かな場所となっていますが、本谷（「主要な谷」の意）は16世紀後半から18世紀後期にかけて石見銀山における最も重要な採掘の中心地の1つでした。かなり大きな集落が谷の一帯に広がっていて、そこでは銀の加工場としての役割も果たした家々が平坦で階段状になった土地の上に建てられていました。谷の入り口付近には数々の坑道と縦坑からなる石見銀山で最も巨大な採掘網である大久保間歩があります。そこからさらに奥へ行くと、大久保間歩から出た地下水を排出するために掘られた全長800メートルの金生坑があります。谷を登っていくと、両側の斜面に鉱山労働者が崖へと直接掘ったとみられる狭い坑道や遺跡が点在しています。この地域では銀の鉱脈が地表のとても近くにあることが頻繁にあったからです。こうした遺跡のほとんどは自然の草や木に覆われてしまい、見つけるのが難しくなっています。しかし、17世紀初期に石見銀山の銀の産出量を飛躍的に増加させた釜屋間歩の周囲では、そうした遺跡のいくつかが掘り起こされています。階段状になった土地を補強するために造られた石壁のいくつかもこの場所で見ることができます。さらに上の方へ進んでいくと、地域で最も豊富な銀の鉱脈の1つの上に掘られた本間歩（「主要な坑道」の意）への入口があります。この場所から、仙ノ山の頂上と17世紀におけるもう1つの主要な集落であった石銀へと上っていくにつれて、谷の幅が狭くなっていきます。本間歩から石銀までの道のりはあまり手入れがされておらず、横断していくのが困難な場合もあるので、訪れる際は注意しましょう。